

図書紹介

『社会はいかに記憶するか 一個人と社会の関係一』
(ポール・コナトン著、芦刈美紀子訳、新曜社、2011年)

近藤喜重郎*

本書は、普通は個人の能力として考えられている記憶を社会的な能力として探究した Paul Connerton の *How Society Remember* (1989) の邦訳である。著者は、「集合的記憶または社会的記憶と呼ぶべき現象」の仮説を支持し、「集団の記憶がいかに伝達され、維持されるか」という問題を提げている。訳者は本書あとがきで、「社会と個人のつながりをどう解明するのか、つまり、ひとつの社会が一人ひとり異なり、それぞれに自由意志で行動する個人からなるにもかかわらず、いかにしてその集団が外から見てわかるようなまとまりをもち、ほかからひとつの集団として認識されうるようになるのか」が現代の社会科学の焦点にあると述べている。以上の問題設定に表れた問題意識は、トインビーの『歴史の研究』に遡るまでもなく、文明研究にも共通する。

本書の章構成は次の通りである。

第1章・社会の記憶

第2章・記念式典

第3章・身体の実践

第1章は回想という概念の説明から始まる。人は何かの過去を回想する時、はじめて歴史の連續性を認識することができる。ただし著者は、「社会の記憶は、歴史の再構築の活動と呼ぶにふさわしい、固有の実践とは区別されるべきである」という。それというのも、歴史の再構築は回想の恣意性によるからだ。このことは、「ひとつの社会集団が協力して、完全に新しいスタートを切ろうとする時に特にあてはまる」。

著者はまた、「過去の人間の営みについての知識は、その痕跡についての知識を通して初めて存在しうる」と書いている。これに見るように、著者は知識と記憶、回想を注意深く使い分け、さらに2種の知識の区別を明示して、過去の人間の営みの「痕跡」はそれら2種の知識をもった人々に「知覚可能な符合」だというのである。

* 東海大学外国語教育センター第二類

実際、3・11以後の日本のように、新しいスタートを切ろうとする社会ではしばしば、その意図をより強くもつ下位の集団が存在し、それらの集団を通して新しい歴史観が示されることがあるが、これは回想の恣意性による。また、その下位集団は、他の集団と異なる歴史観を持ったとしても、歴史の知識に必要な符号を共有している限りにおいて一つの文化、一つの社会に属しているとみなされる。社会の固有性は歴史の符号にあることが示される。

第2章ではナチス主催の記念式典から議論が始まる。著者によると、ナチスは記念式典を繰り返し行なって参加者に民族共同体としての回想を繰り返させ、その回想を通してインターナショナルな特性を排除した国家社会主義の国民への浸透を意図したという。回想のための符号は社会に一体性を与える絆として機能する一方、絆の観念はそれによって外部に置かれる人々の存在を不可避的に伴っている。

著者はまた、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などに見られる、儀礼を通して歴史の創始と思想の浸透を図る営みを取り上げる。儀礼解釈は、個人史に還元する方法、集団内に共有される価値観に還元する方法、歴史的意味発展を重視する方法と、どの方法をとるかによってそのイメージは大きく変わる。ただし、どの方法をとるにしても、それぞれの記号化が不可欠であることが指摘される。

著者は儀礼解釈の障害になりうる問題を2つ挙げている。1つは儀礼内容への解釈者の志向である。形式を十分に弁別することなく内容を論ずる場合、論者の恣意が入り込む可能性が高いというのである。もう1つは歴史や過去を軽視する解釈者の恣意の問題である。かつてマルクスは、資本主義はそれぞれの社会や文化に固有の文化や伝統を一掃する力をもっている、と批判したが、著者はこれを取り上げて、社会儀礼が文化破壊の緩衝材や外壁の役割を果たしているという。

第3章では儀礼の形式的側面から離れて遂行的側面へ話が及んでいる。著者は人の日常の行動も社会儀礼とみなし、身体の振舞いや所作による具体化の実践と記録のための表記の実践に分類する。人の姿勢や身振りはその人の特性を表す。例えば、見上げると見下ろすなどのように、「上」と「下」とに言語化された表現は、人の所作を表すと同時に人間関係も表す。また、「姿勢をまっすぐにする」というときの副詞「まっすぐ」は身体の形状を意味し、「まっすぐ走る」といえば移動の方向性を意味するが、「生きる」という動詞と結び付くと「正しく」や「高潔に」などの倫理的な意味をもつ。

アルファベットに代表される文字の発明は社会の記憶に大きな影響を及ぼした。文字を書く人は書くときの姿勢も記憶している。このことはメディアとそれを使用

する人の姿勢と一般化することができるであろう。習慣が所作に表れるのである。現代でいえば電車の中で本を読む人と携帯電話を操作する人では姿勢や所作が当然違う。また、文章を綴る時に手書きに慣れている人とパソコンで打つのに慣れた人、携帯電話で打つのに慣れた人では手の動き方や速度が違う。

著者は、アルファベット、映画、ジェスチャー、テーブルマナー、宫廷儀礼、ピアノの演奏など、様々な実践を通して伝達される事柄を論じている。著者はメディアという言葉を特に用いているわけではないが、メディアの使用には特定の手続き記憶が必要であり、その記憶には習慣が不可欠である。記憶は習慣すなわち日常の所作と不可分であるから、その意味は記号だけに還元されるわけではないが、記憶は習慣だけに還元されるわけでもない。「身体とは二重の意味で社会的に構成されている」のである。

本書では社会の記憶に関する理論的な側面を説明するために豊富な事例が用いられ、先行研究の分析概念も多く援用されている。それらの先行研究に記号論は特に含まれず（ソシュールは登場するが）、訳者も記号概念をさほど強調していない。が、記号概念は本書の議論で重要な価値を与えられている。